

生ける神に仕えるダニエル（6）

2009. 3. 3（火）

ベック兄メッセージ（メモ）

引用聖句

ダニエル書 9章1節から9節

メディア族のアハシュエロスの子ダリヨスが、カルデヤ人の国の王となったその元年、すなわち、その治世の第一年に、私、ダニエルは、預言者エレミヤにあった主のことばによって、エルサレムの荒廃が終わるまでの年数が七十年であることを、文書によって悟った。そこで私は、顔を神である主に向けて祈り、断食をし、荒布を着、灰をかぶって、願い求めた。私は、私の神、主に祈り、告白して言った。「ああ、私の主、大いなる恐るべき神。あなたを愛し、あなたの命令を守る者には、契約を守り、恵みを下さる方。私たちは罪を犯し、不義をなし、悪を行ない、あなたにそむき、あなたの命令と定めとを離れました。私たちはまた、あなたのしもべである預言者たちが御名によって、私たちの王たち、首長たち、先祖たち、および一般の人すべてに語ったことばに、聞き従いませんでした。主よ。正義はあなたのものですが、不面目は私たちのもので、今日あるとおり、ユダの人々、エルサレムの住民のもの、また、あなたが追い散らされたあらゆる国々で、近く、あるいは遠くにいるすべてのイスラエル人のものです。これは、彼らがあなたに逆らった不信の罪のためです。主よ。不面目は、あなたに罪を犯した私たちと私たちの王たち、首長たち、および先祖たちのものです。あわれみと赦しとは、私たちの神、主のもので、これは私たちが神にそむいたからです。」

ダニエル書 9章20節から23節

私がまだ語り、祈り、自分の罪と自分の民イスラエルの罪を告白し、私の神の聖なる山のために、私の神、主の前に伏して願いをささげていたとき、すなわち、私がまだ祈って語っているとき、私が初めに幻の中で見たあの人、ガブリエルが、夕方のささげ物をささげるころ、すばやく飛んで来て、私に近づき、私に告げて言った。「ダニエルよ。私は今、あなたに悟りを授けるために出て来た。あなたが願いの祈りを始めたとき、一つのみことばが述べられたので、私はそれを伝えに来た。あなたは、神に愛されている人だからだ。そのみことばを聞き分け、幻を悟れ。」

ダニエル書 10章9節から12節

私はそのことばの声を聞いた。そのことばの声を聞いたとき、私は意識を失って、うつぶせに地に倒れた。ちょうどそのとき、一つの手が私に触れ、私のひざと手をゆさぶった。それから彼は私に言った。「神に愛されている人ダニエルよ。私が今から

語ることばをよくわきまえよ。そこに立ち上がれ。私は今、あなたに遣わされたのだ。」
彼が、このことばを私に語ったとき、私は震えながら立ち上がった。彼は私に言った。
「恐れるな。ダニエル。あなたが心を定めて悟ろうとし、あなたの神の前でへりくだ
ろうと決めたその初めの日から、あなたのことばは聞かれているからだ。私が来たの
は、あなたのことばのためだ。」

ダニエル書 10章19節

言った。「神に愛されている人よ。恐れるな。安心せよ。強くあれ。強くあれ。」
彼が私にこう言ったとき、私は奮い立って言った。「わが主よ。お話してください。あ
なたは私を力づけてくださいましたから。」

先週、福岡で喜びの集いがありました。その前に、あるおばあちゃんの記念会がありま
した。K姉妹の記念会でした。その時、一つのビデオも見せてもらいましたが、あのおば
あちゃんが、比較的まだ元気な時の証しでした。彼女はイエス様に出会ってからちょっと
妥協したのです。ダニエルとその三人の友だちとは全く違う態度をとったのです。救われ
ているのに、誰にも分からないように、「隠れクリスチャンとして死ぬまでがんばろう」。
そのような気持ちがあったらしいのですけれど、ある時、やはりそれでは駄目だと思って、
はっきりとした態度をとりました。その時（何年前だったかちょっと忘れましたが）、次の
ように証しました。

本日はご多忙の中、また、こんな辺鄙な山奥までお出でいただきまして、ありがとうご
ざいました。親戚の者はさぞ驚いて困惑していると思います。私は、この歳でイエス様を
知ったこと、また生きていてイエス様を証しする幸いに恵まれましたことを感謝します。
私は、本当は、イエス様を信じ受け入れたことを、生涯言うことができないままこの世を
終わるだろうと思っておりました。けれど、イエス様はそのことをお許しにならず、今日
このように皆様の前でお証しすることになりました。

生まれてからこれまで仏教しか知らなかった私ではありましたが、夫を23年前に
亡くし、二人の娘たちも嫁ぎ、残された母も96歳で六年前に亡くなり、言い知れぬ孤独
になりました。すでに信仰を持っていた下の娘から、イエス様の話しは嫌というほど聞か
されておりました。けれど、全く聞く耳を持たず、むしろ反発さえ感じておりました。

ある日、イエス様が直接私に語られて、イエス様が私の心の中にずっと入ってこられま
した。今まで経験したことのないような喜びと平安に満たされ、嬉しくてたまらない毎日
でした。そして5年前に受洗しました。受洗する時に上の娘から、「おばあちゃんたちに何
と話すの？」と聞かれました。人の目を恐れる私にはできないと分かっていたのでしょ
う。結局、イエス様を信じたということ、親戚の者にも実の兄弟にさえも言うことができず、
隠れクリスチャンのようでした。だんだん心が落ち着かなくなり、度々行なわれる法事な

どの時、どのようにしたらよいか分からなくなっていました。主人の母の法事が近づき、ますます心が落ち着かなくなり、喜びもなくなっていました。

別府での喜びの集いの時、姉妹がたとの交わりの中で、主は、私の長年の悩みを光の中に出されました。主から、今まで親戚の者たちに黙っていたことを示され、この際、信じたことを明らかにしていこうと決心しました。でも、現実を見れば、とても恐ろしくなりました。しかし、すべてのことを主がなさってください、ひとりひとりにイエス様を信じたことを話しに行くように導かれました。

まず、先祖代々の納骨堂はお寺の境内の中にあり、この際イエス様だけを信じていくためにお寺と、はっきり決別してお墓を購入することにしました。親戚の者たちの多くは、「どうして今さらこの歳になってイエス様を信じなくてはいけないのか？」と申しましたけれど、この歳だからこそイエス様が必要になりました。イエス様は生きておられ、私にいつも語って導いてくださいます。「頭が変になった」と言う人もいましたけれど、この喜びには変えられません。

これからどのようなことが私に起こるか想像もできませんが、イエス様の御手にすがって、主イエス様だけを信じて生きていきたいと思っています。残された人生、自分の信じたとおりに生きていきたいです。いつも励ましになった聖書のみことばは、
マタイの福音書 11章28節

「すべて、疲れた人、重荷を負っている人は、わたしのところに来なさい。わたしがあなたがたを休ませてあげます。」

そして、

テサロニケ人への手紙・第一 5章16節から18節

いつも喜んでいなさい。絶えず祈りなさい。すべての事について、感謝しなさい。

この二つのみことばです。今日はありがとうございました。

このような証しでした。その後、彼女は病気になり、重病人になり、痩せてしまい、痛みもあり、ぼろぼろになってしまいました。けれど、彼女はイエスを仰ぎ見つめながら、死ぬまでイエス様に頼ったのです。昔のダニエルとその友だちだけではなく、現代人の多くも、妥協せず、主に頼るようになっているので本当に嬉しいです。

テサロニケ第二の手紙の中から、この間引用した箇所です。

テサロニケ人への手紙・第二 1章5節

あなたがたが苦しみを受けているのは、この神の国のためです。

と記されています。

今日まで私たちは、ダニエルを通して、主はどのように暗い環境、暗い世にあっても、

信仰をもって主を証しする人々を探しておいでになることを見てきました。

しかし、主に従って、主を第一にしたダニエルとその友だちは、いったいどうしてあのように妬まれ、あざけられ、圧迫され、誤解されたのでしょうか。もちろんもっともっと主に頼るために違いありません。

ダニエルや、ダニエルの友だちのように、この世と妥協せず主に従おうとすると、彼らと同じように激しい攻撃にあわせられるに違いありません。七倍も熱くした火の炉の苦しみ、また獅子の穴に投げ込まれるといった死の影の谷を歩ませられるでしょう。

信じる者の多くは、人に言うことの出来ない、隠れている苦しみや問題があります。なぜこのような問題があるのか。なぜこの苦しみがあるのか。聖書の答えは、「神の国の民にふさわしい者とするため、神の国のためである」と記されているのです。使徒たちも同じことを宣べ伝え続けました。

使徒の働き 14章22節

弟子たちの心を強め、この信仰にしっかりとどまるように勧め、「私たちが神の国にはいるには、多くの苦しみを経なければならない。」

結局、他の道がないのです。

どうして、私たちの毎日の生活にはこんなに隠された悩みや苦しみがあるのでしょうか。それは、イエス様のご支配が現われるためです。主が、全宇宙を支配なさることが問題であるばかりではなく、私たちもちっぽけな人間として、主と共に支配しているかどうかの問題です。私たちも主と共に支配するということは、主が私たちを召して、そうさせようとしておいでになることです。将来にもいろいろなことが起こるでしょう。戦いがあり、悩みも苦しみも起こるでしょう。それはみな、私たちが天の御国にふさわしい者となるために起こるのです。主とともに支配するためにふさわしい者となるためです。これは、私たちがどんな悩みの中にあっても、喜ぶことができる大きな望みなのではないでしょうか。

将来に私たちは、何を待ち望んでいるのでしょうか。待ち望んでいるものは不確かなものではありません。不安と滅びではありません。主と共に支配するという素晴らしい事実が私たちを待っているのです。

今まで、おもにダニエル書1章から6章までで、この永遠の御国を主と共に支配するためにふさわしい人々は、いったいどのような人々であるかを学んできました。私たちも主と共に永遠の御国を支配する者となるべきです。

1章には、いわゆる「聖さ」について書かれています。

ダニエルは、汚れたもの、即ち偶像にささげられたものを食べて自分を汚すまいと心に思い定めた、とあります。私たちの心も、そのように決心しているのでしょうか。私たちは人を恐れず、ひたすら主にだけ従っていこうと心に思い定めたのでしょうか。

もし、そのように全く主に従おうと思い定めるなら、御霊は私たちの心の深くに、何が

良いか悪いか、何が聖いか聖くないか、また何が妥協であるか妥協でないかを、必ず教えてください。

ダニエルはどのような態度をとったかと言いますと、誰が何と言おうと主に従おうと決意を固めていたのです。このように身も心もささげてゆだねきっているダニエルを、主は見放されなかったのです。彼は守られただけではなく、多くの人々のための祝福となりました。信仰をもって主に従順に従っていくと、驚くべき祝福が伴います。主にすべてをささげ、世と妥協せずに歩む者は、決して悔いることはありません。私たちも、ダニエルのように主に従い、限りない主の恵みにあずかる者になりたいものです。

ダニエルは、結果がどうであろうと、どこまでも主に従っていこうと決心したのです。目に見える現実はどうであれ、彼は目に見えない主に頼りました。主とともに永遠の国を支配する人は、このように「霊の聖さ」を持っていなければなりません。

次に、2章を見ると分かります。更に必要なのは、「見分ける力」です。

主の支配なされる世界と悪魔の支配する世界があります。私たちの今の現実にいる世界は、悪魔に支配されている世界です。言うまでもなく、これもイエス様によるものなのです。イエス様がお許しにならなければ、悪魔は何もすることができません。しかし現実問題として、主に支配されている世界と、悪魔に支配されている世界があります。これは主に属しこれは悪魔に属する、と見分ける力も必要です。この二つの世界の真ん中に立って妥協すると、霊的ないのちが無くなりますし、力も無くなります。残念ながら多くの方は二つの国を見分ける力が無く、力を無くしてしまっているのです。私たちは、人の名誉がもてはやされ、人間的な判断が立てられているこの世の支配から、全く救い出されているのでしょうか。

かつてパウロは、人間に認められていたい、尊敬してもらいたい気持ちでいっぱいでした。けれど、イエス様との出会いによって彼は全く変わりました。彼は、よく引用されるガラテヤ書1章10節に、次のように公に告白しました。

ガラテヤ人への手紙 1章10節

いま私は人に取り入ろうとしているのでしょうか。いや。神に、でしょう。あるいはまた、人の歓心を買おうと努めているのでしょうか。もし私がいまなお人の歓心を買おうとするようなら、私はキリストのしもべとは言えません。

私たちは、この二つの世界の力を見分ける力を持つ必要があります。これなくしてイエス様とともに永遠の御国を治めることは、もちろん無理です。できません。

3章では、主はどのような人々を探し求めておいでになるかと言いますと、「真実な人々」をです。

主に真実を傾けて十分に従う人々に、この素晴らしい「真実」という賜物が与えられます。生まれつき持っている人間はいません。

ダニエルとその友だちは、自分たちが今住んでいるバビロンの国は必ずいつか滅んでしまう。しかし、自分たちが仕えている主の国は永遠にとどまる、ということを確認しました。見分ける力があったからです。ですから、彼らは永遠なる主だけに仕えたいのでした。そして、真実を尽くしてこの主に従っていこうと心から思ったのです。

ダニエル書 3章18節

「しかし、もしそうでなくても、王よ、ご承知ください。私たちはあなたの神々に仕えず、あなたが立てた金の像を拝むこともしません。」

この王とは、ネブカデネザル大王でした。全世界を治めた男でした。彼に向かって…。妥協するよりも死んだほうがましだと彼らは思ったのです。三人は激しい試みの中で、どのようであったのでしょうか。少しも動揺しませんでした。たとえ火に焼かれようとも、主に真実を尽くして従っていったのです。なぜ、このようにできたのでしょうか。彼らは、この世のものはすべてむなしく、主の御国のみ永遠に続くことがはっきり分かったので、確信できたのです。

イエス様とともに支配するために必要なことは何でしょうか。

4章によると、イエス様とともに支配するためにどうしても必要なことは、「謙遜」です。4章37節を見ると、次のように書かれています。

ダニエル書 4章37節

今、私、ネブカデネザルは、天の王を賛美し、あがめ、ほめたたえる。そのみわざはことごとく真実であり、その道は正義である。また、高ぶって歩む者をへりくだった者とされる。

この王は、傲慢そのもので、全く主なる神に対して無関心でした。聞く耳を持っていなかったのです。けれど、珍しい方法で彼の心のまなこが開かれるようになりました。彼はこのように告白することができたのです。

ここでは、ダニエルではなく、王のネブカデネザルが謙遜の学科を学ばせられています。けれど、ダニエルはいつも王と一緒にいましたから、ダニエルもまたこの学科を王とともに学んだに違いありません。

ここには驚くべき主の忍耐が書かれています。主は、ネブカデネザル王を一撃のもとにこの地上から抹殺することもできたはずですが、主はそうならなかったのです。初めにまず厳しく忠告し、王がそれを受け入れないと知るや、忍耐をもって更に十二箇月間お待ちになりました。その時王は気が狂ってしまったのです。けれど、この王を主なる神は捨てようとなさらなかったのです。考えられないことが起こりました。もう一度王の位にお返しになりました。私たちはなぜ主が王に忠告されたか分かりません。ネブカデネザルはどんな悪いことをしたのか、はっきり分かりません。聖書は記していないからです。

けれど、サムエル記の第一を見ると、次のように書かれています。問題は、見えるもの

ではなく、「心」です。サムエル上16章7節です。主のお考えとはどのようなものであるか、書き記されています。

サムエル記・第一 16章7節

主はサムエルに仰せられた。「彼の容貌や、背の高さを見てはならない。わたしは彼を退けている。人が見るようには見ないからだ。人はうわべを見るが、主は心を見る。」

主は、ネブカデネザルの心を見て、そこにいけないことを見られました。多分ネブカデネザルは、自分は全世界の支配者であるので、心に誇るところがあったのではないかと思います。主は、傲慢な王を、傲慢な支配者を求めておられません。ですから、ネブカデネザルを打って、砕いて、37節のように、王をして言わしめるまになさいました。

ダニエル書 4章37節

今、私、ネブカデネザルは、天の王を賛美し、あがめ、ほめたたえる。そのみわざはことごとく真実であり、その道は正義である。また、高ぶって歩む者をへりくだった者とされる。

主は、私たちがイエス様とともにこの世だけでなく、全宇宙を支配するようにしてください。けれど、全宇宙を支配する支配者として、高ぶる者を必要とされません。主は高ぶる者をいつの時代にも受け入れることがおできになりません。退けざるを得ないので、もし、主が忍耐をもってネブカデネザルに接せられたと同じように、私たちに対しても、忍耐をもって取り扱ってくださらなければ、私たちは決して決して主とともに御国を支配することとしないでしょう。

イエス様はマタイ伝5章3節ですが、次のように言われました。

マタイの福音書 5章3節

「心の貧しい者は幸いです。天の御国はその人のものだからです。」

私たちは何と高ぶる心に満ちた者でしょう。主は、何にもまして一番、高ぶりの心を憎まれます。ですから、主は、私たちがネブカデネザルのようにへりくだって、主を崇めるようになるまで、いろいろな困難や苦しみを通して練り聖めてくださるのです。

パウロでさえも同じお取り扱いにあいました。次のように書かれています。

コリント人への手紙・第二 12章7節

また、その啓示があまりにもすばらしいからです。そのために私は、高ぶることのないようにと、肉体に一つのとげを与えられました。それは私が高ぶることのないように、私を打つための、サタンの使いです。

「一つのとげ」、「一つの病気」を与えられました。それは天罰としてではなく、高ぶることのないように、です。悪魔、サタンの使いでさえも、自分勝手なことをすることができ

ません。みこころが成るための単なるしもべに過ぎません。

このダニエル書4章は、私たちにとって大きな慰めを与えてくれます。もはや自分の上には主の恵みがない、主の愛は私から離れ去ってしまったと思うようになるまで、霊的に試みられる時があります。逃げようと思っても、逃げ道がなくなってしまったような状態に入る時があります。これは、主が愛をもって私たちの心を試され、ネブカデネザルと同じように、35節のように言えるようにするためではないでしょうか。

ダニエル書 4章35節

地に住むものはみな、無きものとみなされる。彼は、天の軍勢も、地に住むものも、みこころのままにあしらう。御手を差し押えて、「あなたは何をされるのか。」と言う者もいない。

と書かれています。

ダニエルとその友だちは、いったいなぜ祝福されたのでしょうか。守って用いられたのでしょうか。彼らは、何があっても自分勝手なことをしたくない、主と共に働きたいと切に望んだからです。

そうすると、主と共に働こうと思うならば、もちろん最も大切なのは、「祈ること」です。自分の力では何もできないからです。ダニエルとその友だちの特徴は、彼らは祈った人々というよりも、「祈りそのもの」でした。主が守ってくださらなければ、希望はありません。23節をもう一度読みます。

ダニエル書 9章23節

「あなたが願いの祈りを始めたとき、一つのみことばが述べられたので、私はそれを伝えに来た。あなたは、神に愛されている人だからだ。そのみことばを聞き分け、幻を悟れ。」

ダニエルはこのことばを聞いた時、何を考えたかちょっと分かりません。ピンとこなかったでしょう。どうして愛されているか分からなかったはずですが。けれど、主ご自身がそうおっしゃられたのです。「あなたは、神に愛されている人」と。10章11節に同じ言葉が書かれています。

ダニエル書 10章11節

それから彼は私に言った。「神に愛されている人ダニエルよ。私が今から語りことばをよくわきまえよ。そこに立ち上がれ。私は今、あなたに遣わされたのだ。」彼が、このことばを私に語ったとき、私は震えながら立ち上がった。

同じ言葉が、また19節に出てきます。

ダニエル書 10章19節

「神に愛されている人よ。恐れるな。安心せよ。強くあれ。強くあれ。」彼が私にこ

う言ったとき、私は奮い立って言った。「わが主よ。お話してください。あなたは私を力づけてくださいましたから。」

この言葉は、主の御口から出た実に驚くべき恵みに満ちた言葉です。まことの主はもちろん嘘を知らないお方です。小さなことをいかにも大きいものであるかのように誇張して話すことをなさいません。主が語られるなら、真実をもってご自分のみこころにあることをそのままお語りになります。主はダニエルに、「わが愛する人よ」と声をおかけになりましたが、そうお語りになるには何か理由があるはずです。主、全知全能なる主がそうおっしゃられるには、その後ろに何か理由があるはずです。「わたしはあなたを愛している」。これは、ダニエルに対する天の判断でした。もし、私たちも同じ言葉をかけられるならば、どんなに幸いなことでしょう。ダニエルは、主に愛されたのです。

聖書を読んでいきますと、私たちも主に愛されている者であることが分かります。理解できない、説明することもできないのですが、そうなのです。聖書の中の一番中心となるみことばは、言うまでもなくヨハネ伝3章16節でしょう。

ヨハネの福音書 3章16節

神は、実に、そのひとり子をお与えになったほどに、世を愛された。それは御子を信じる者が、ひとりとして滅びることなく、永遠のいのちを持つためである。

「ひとり子」つまりイエス様を。「世を」とは、あなたつまり私を、愛された。

ローマ書5章8節を見ても、同じように書かれています。初代教会の証しでもあります。ローマ人への手紙 5章8節

しかし私たちがまだ罪人であったとき、キリストが私たちのために死んでくださったことにより、神は私たちに対するご自身の愛を明らかにしておられます。

人間が神様にどうしてそんなに心配され、愛されているか、いくら考えても誰も分かりません。説明することができません。ヨハネ第一の手紙4章9節、10節を見ると、また次のように書き記されています。

ヨハネの手紙・第一 4章9節、10節

神はそのひとり子を世に遣わし、その方によって私たちに、いのちを得させてくださいました。ここに、神の愛が私たちに示されたのです。私たちが神を愛したのではなく、神が私たちを愛し、私たちの罪のために、なだめの供え物としての御子を遣わされました。ここに愛があるのです。

罪滅ぼしのために、イエス様は罪のかたまりにされてしまったのです。愛されている証拠とは、「十字架につけられた主イエス様」です。主は汚れた罪人を愛し、この世すら愛してくださるということを思うと、主の愛を感じて賛美と感謝が湧き上がってきます。

全宇宙をお造りになり、限りない栄光のうちに住んでおいでになるイエス様がその御位を捨て、罪を犯し、汚れ、主に逆らう人々を救うために、人間の形をとり、地上に来られたということは、人間の頭では理解できない驚くべき「神の愛」そのものです。

なぜ、主はダニエルに向かって、「大いに愛されている人」と言われたのでしょうか。ダニエルが罪人だったからでしょうか。主に逆らう者だったから、主はダニエルを愛されたのでしょうか。もちろんそうではありません。ダニエルは、主とともに働く者、とりわけ祈りにおいて主とともに働く者であったので、「主に大いに愛された人」と呼ばれたのです。

よく考えるべきことは何であるか。即ち「天にまで届く祈り」とはどのようなものなのか。その答えは、「主のみことばに基づいた祈り」です。

ダニエル書 9章2節

すなわち、その治世の第一年に、私、ダニエルは、預言者エレミヤにあった主のみことばによって、エルサレムの荒廃が終わるまでの年数が七十年であることを、文書によって悟った。

とあります。

このみことばを見ると、ダニエルは聖書を読んでいたことがよく分かります。自分で考えるよりも、やはりみことばを読むべきだと彼は思ったのです。主のみことばは、ダニエルの第一の場所を占めていました。ダニエルは、みこころを正確に知るべきであるとはっきり分かったのです。ダニエルはなぜ聖書を読んだかと言いますと、知識を、いわゆる頭の知識を蓄えるためではなく、みこころを知りたい、みこころを正確に知らなくてはいけないと思ったからです。私たちはどのような態度でみことばを読んでいるのでしょうか。どのような理由でみことばを読むのでしょうか。

天に届く祈りをする前に、まず私たちは今の時代における私たちに対する主のみこころは何か、主のご目的は、主は私たちをどのように考えておいでになるかを知る必要があります。祈ることは大切です。けれど、「聖書は何と言っているか」と、まず知るべきではないでしょうか。聖書を読むことも大切です。けれど結果として、人は祈らなければあまり意味のないことです。「聖書と祈り」、「祈りと聖書」は、一つにならなくてはなりません。

ダニエルが祈った時、その祈りは天に届きました。それは、ダニエルが主のみこころをよくわきまえて、知っていたからです。もし、ダニエルが主のみこころを知っていなかったなら、どんなに熱心に祈っても何も起こらなかったでしょう。

多くの人は、祈り求め、いろいろな願いを主に申し上げますが、聞き届けられません。それは、主のみこころを知らず、むやみに祈るからです。ダニエル書には、将来何が起こるかいろいろ預言されていますが、この預言を研究してその知識を蓄えても、もし私たち

の実際生活が主によって変えられていかなければ、何の役にもたちません。

したがって、ダニエル書の中から預言的なことよりも、むしろダニエルの「人格」を学び、それを自分のものとしていきたいと思うのです。とりわけダニエルの祈りを学び、私たちもダニエルのように「祈り人」となりたいと思います。

私たちは、何よりもまず今の時代における主のご目的を知らなければなりません。その他のことはみな第二次的なことです。ダニエルは、信じる者に対する主のみこころをよく知っていたのです。もし、私たちが「愛されている人よ」と主に喜ばれたいなら、私たちもダニエルと同じように、主のご目的を知らなければならぬのではないのでしょうか。

新約の時代、パウロは全世界に伝道旅行をし、全世界の信者と連絡をとり、各地で奉仕しました。けれど、主はそのパウロを突然牢屋に入れることを良しとされたのです。どうしてでしょうか。それは、パウロに今の時代における主のみこころが何であるかを教えるためにそうなされたのです。そのことを考える時をお与えになったのです。

パウロが牢獄で記した、エペソ書、コロサイ書、ピレモン書を読むと、その書簡の中に「主の永遠の秘密」がパウロに現わされたことが分かります。即ち、信じる者は「イエス様のからだ」であり、全く天的なものであり、かしらに、人間ではなくイエス様をいただいている者です。多くの人々は、信じる者の群れが全く天的なものであり、霊的なものであり、世界的なものであることを知らないからです。

ダニエルは、その時代における主のご目的をよく知っていたばかりではなく、主はこのご目的を一つの狂いもなく成就されるお方であることを確信していました。これこそダニエルの祈りが天を動かした原因だったのです。それが必ず実現されないことだったら熱心に祈る人は誰もいません。それは必ず実現するという確信があって初めて、熱烈な祈りをささげることができるのです。ダニエルは、主はご目的を変えられないことを知り、ご目的を必ず成し遂げられると確信して祈りましたので、彼の祈りは天に届きました。

パウロは、エペソ書の終わりに次のように書いたのです。これを読んで終わらしましょう。
エペソ人への手紙 6章18節

すべての祈りと願いを用いて、どんなときにも御霊によって祈りなさい。そのためには絶えず目をさまして、すべての聖徒のために、忍耐の限りを尽くし、また祈りなさい。

と書いてあるのです。絶えず祈り、どんな時にも御霊によって祈り、多くの聖徒のためではなくて、大部分の聖徒のためではなくて、「すべての聖徒のために祈りなさい」とあります。私たちは、この標準から何と離れていることでしょう。

了